

中村幸彦著述集

第十二卷

©一九八三

中村幸彦著述集 第十二卷

定価六五〇〇円

昭和五十八年二月十日印刷
昭和五十八年二月二十日発行

著者 中村 幸彦

発行者 高 梨 茂

印刷者 青 木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七
振替東京二一三四
検印廃止

中村幸彦著述集

第十二卷

国学者紀譚

目次

一	国学雜感——直毘靈をめぐって——	九
二	契沖讃	四
三	万葉考自筆の一稿本	元
四	紀伊殿の閨秀歌人達	五
五	万葉集をめぐる国学者の生活	六
六	栗田土満稿本 古事記伝をめぐる	一三〇
七	上田秋成伝浅説	八
	1 秋成とその交友 (二三〇)	
	2 小資料 (二三五)	
八	賢愚同袋	二四七
	1 宣長の書簡 (二四七)	
	2 真淵、美樹と土満 (二五二)	
	3 豊藏坊信海の歿年 (二六二)	
	4 道麿と土満 (二六五)	
	5 仙果『へたてぬ中の日記』抄 (二七七)	
	6 馬琴の書画会 (二七九)	
	7 久老の放誕 (二八七)	
	8 小篠敏伝攷 (二九五)	

9 伴信友軼事 (三〇)	12 表太のこと (三七)
10 宗長居士伝の撰者 (三〇)	13 馬琴の姿勢 (三八)
11 大館高門の墓 (三五)	14 馬琴日記に寄せて (四二)
付一 細川幽斎の文学生活 ――慶長初年――	
付二 安楽庵策伝とその周囲	

○

九 擬古文論

後記

書誌

三九六
四一五
四一九

〈挿画〉

古事記伝巻一	四	桂宗信の墓	二五	無腸居士肖像	二四
万葉考真淵自筆本	四〇	万世百人一首女大全口絵	二五	無腸自画肖像	二四
もみ子家集	五			文麗筆肖像	二四
橘千陰書簡	六	香具波志神社	二五	西福寺陶像	二四
八十浦の玉	八	藤家孝の墓	二五	宣長書状	二五
蓬萊雅楽書状	八	秋成の墓	二六	宇万伎書状	二六
文反古稿	一三	秋成の顔	二六	大団	二六
春雨梅花歌文卷	一五	秋成書状	二五	天明三年伊勢日記	二六

馬琴書狀
久老書狀
小篠敏書狀

二五
二九
三〇

旅中備忘
加藤字万伎の墓
藤孝君綿考輯録

三六
三六
四九

策伝和尚送答控
策伝墓碑

三七
三二

国学者紀譚

一 国学雜感

——直毘靈をめぐって——

これは昭和五十五年四月二十七日、天理大学の国文学会に於ける講演の草稿によったものである。その後には、ここに大きな問題が存する。それにつきこのような考えを持っているが、如何であろうかと、問題を提起して、興味をいだかれる方々にも一考を願う方が面白かろうと思う。よってこの日頃、時々脳中を去来する一事を採上げることにする。題して、「国学雜感」という。

本日は国文学専攻の方々ばかりの会合なので、私が何か小さい問題の結論らしいものを得た事柄を話するよりは、ここに大きな問題が存する。それにつきこのような考えを持っているが、如何であろうかと、問題を提起して、興味をいだかれる方々にも一考を願う方が面白かろうと思う。よってこの日頃、時々脳中を去来する一事を採上げることにする。題して、「国学雜感」という。

国学は一種の古典学であるが、多方面な分野を持つ。試みに本居宣長の『うひ山ふみ』につけば、一に道の学問、即ち思想。二に有職故実の学、三に史学、四に文学（研究と創作）と大体四つに分類している。本日対象とす

るのは、その一思想、道の学問である。宣長の言葉によれば、

そもく此道は、天照大御神の道にして、天皇の天下をしろしめす道、四海万国にゆきわたりたる、まことの道なるが、ひとり皇国に伝はれるを、其道は、いかなる道ぞといふに、此道は、古事記書紀の二典フタミツミに記されたる、神代上代の、もろくの事跡のうへに備はりたり

と述べる道である。ここで一段大きな視野を設定する。現今の近世思想史の研究を見渡すに、一応儒学、仏教、国学を鼎立させ、更に近世仏教は既にかつての思想的活力を失ったものと解して、これを軽んじ、儒学と国学を二つの柱として説く習慣になっているようである。果して国学の思想が、近世に於てそれ程大きな勢力をもっていたのであろうか。近世仏教が、平安初期、鎌倉期の如く新しい宗派が創成された時の如く活力がなかったのは事実としても、国学に比して、全く捨てて顧られなかったとすることに、既に私は左袒しがたい。のみならず、近世では、思想を論ずる時は、必ず、神、儒、仏と鼎立させるのが普通であつたので、神道をもって、国学にかえ、国学思想をもって神道を代表させるには、大いに片寄りを感ずる。日本思想史には、従来、儒学史、仏教史、神道史などと分立してから、研究する習慣もあつた。現今では、日本思想史を、この三本立のみで済すことにも問題があるが、この三本立の従来の神道史においても、仏家神道、儒学神道、復古神道、教派神道などと分類するのを普通とした。国学の思想とは復古神道に相当する。近世では仏家神道の流れはまだ続き、度会流の儒学神道や垂加神道は、盛んであり、教派神道は漸くその形をなさんとしていたのが、実情ではないか。国学思想即復古神道と解することには、異議の存する処であらうが、前掲した宣長の言に徴しても、神道的色彩の濃いことは否定できない。現今の近世思想史研究における国学の重視は、近世思想界の実情に即するよりも、国学を重視した明治期に於て生じた習慣を無反省に持伝えたものではなからうかと思われるが、これについては後述する。視角

をかえて、国学は、宣長によれば四科にわかれるが、第一の思想に専念した人々がどれ程あったかを、『国学者伝記集成』に求めて見る。この書は、広く近世に於ける日本の古典を研究した人々を集めたので、儒者も堂上歌人も僧侶も混る。仏家神道の人々や儒家神道家も入っている。近世では日本の古典研究を、漢学に対して和学と称した。この書は近世的に言えば、「和学者伝記集成」と名付くべきもので、もし本書所収の人々を悉く国学者と称することを許すならば、広義の使用法としてである。思想史上で国学として取あつかうのは、幕末の国学者が設定した、国学の四大人とその流を汲む人々の学で、これは狭義の使用法ともいえる。今問題とするのは、この狭義の方である。狭義の国学者の中から、道の学問を専らとした人となると、甚だ少いこととなる。しかし大先生の門人達は、自ら発言しなくとも、師説を信仰していたということになるが、今その四大人に就いて、あらあら道の学問をうかがってみよう。契沖は生涯仏家であって、神の道に関する発言は殆どない。荷田春満は神官であったが、儒学思想が、その思想の中に共存している。有名な「世の中に神の道とて道あらば人の外なる人やまなばん」（『荷田春満歌集』『仮名世説』）の一詠からも推察できる。賀茂真淵の『国意考』において、漸く儒仏を退けて、「神代の道」なる語が出現する。このことは後述することにして、やや真淵の説の影響をうけて、本居宣長の『直毘霊』などをもって体裁を整え、平田篤胤が大いに論じ布教したことは人の知る処である。宣長の『直毘霊』が成ったのが、明和八年である。国学者達がこの役所に拠って宗教界は勿論政治、信仰の各方面に権力をふるおうとした明治維新に於ける神祇官の創設が、慶応四年閏四月二十一日。その神祇官が早くも、太政官の下におろされて教部省となり、次第に勢力をなくして、先細りになって行くのが、明治五年である。明和八年から明治五年までその間約百年。如何に流行したとしても、徳川三百年の三分の一の期間である。それでは、その間大いに流行したかといえ、私にはそうとは思われない。三好鹿城が儒者の皆川淇園と並べて、「伊勢の鈴屋も同じ事にて、

世にきこえたる大著述をなし、近来我学の集大成せし人」(『鹿城和言』)といい、浅野梅堂も『寒檠瓊綴』でとかく批評しているが、これら読書家は本居宣長に古典の研究家、文化科学者として対したので、思想家としてではないのである。紀州藩が寛政五年五人扶持を与えたのは、加賀藩よりの招聘に対する対応策であったというが、私はその裏に藩主治宝の祖母であった清信院の存在を考える。この人は幕府寄合御医師吉田意安の女八重で、若く江戸藩邸で世子であった宗将に仕えた。「みほ子」と称して泉居門に遊んだ文学女性なのであった(『紀伊殿の閨秀歌人達』本巻所収)。宣長が、寛政六年十月や寛政十一年二月に和歌山へ参った度毎に、清信院はその吹上御殿に、この同門の後輩を召して、『万葉』『源氏』『古今』などを講じさせている。紀州藩の待遇も、思想家としてでなく古典学者としての方が重であったのではないか。もっともこれより前、先代の藩主治貞から、治世の意見を求められ、宣長は『秘本たまくしげ』(天明七年)を著したことがあった。が今この本を読むに、書生の論と評するの外はない。極端に言えば机上の空論である。大体近世思想史では、本多利明、佐藤信淵など、いわば民間人の経世談に、かなりの評価を与えて、採用している。しかし近時詳細になった、諸藩の藩政や、地方の産業の史的研究を見るに、各藩でそれぞれ特色、習慣があつて、事情も複雑多様である。それらを、彼らの経世談とつき合せて見ると、論者達は、余りにも実情を知らなすぎる。当時の事情が、あのような論で片付くものとは思われない。『秘本たまくしげ』もその一つである。宣長がそうであっても、紀州藩は藩校に国学を置いたではないか、ともいえる。しかし其処では何か悶着が生じて、長沢伴雄は牢死し、加納諸平は頓死している。国学思想も、何もあつた事ではなかった。門人横井千秋が、尾州藩に師を招聘すべく運動したが、実現しなかった。その理由は明らかでないが、同藩藩校に属した学者を初め同藩の諸学者は、実地的な人々が多い。国学を国家有用の学とは評定しなかったのではあるまいか。かかる外界の様相をうかがうより、国学思想は、当時においてどの程度の

思想であつたかを、歴史的に従来説かれて来た説にはかかわらず、理論的に知る爲には、何よりも、この思想の初めと見なされる宣長のその方面の著述に付くべきであろう。彼自らいう。

初学の輩は、宣長が著したる、神代正語を数十遍よみて、その古語のやうを、口なれしり、又直日のみたま、玉矛百首、玉くしげ、葛花などやうの物を、入学のはじめより、かの二典と相まじへてよむべし（『うひ山ふみ』）

と。

○

宣長の神の道に先立って、真淵の『国意考』について、少しは窺うべきであろう。彼の「神代の道」論の大部分は、儒道仏道を批判して、神代の道はしかるべきものではないとの論に費されていて、その道自体の説明は殆どない。その若干を拔出して見る。

こゝの国には、天地の心のまに／＼治め給ひて、さる小き理り（＝儒教ニ云フ仁義忠孝信ナド）めきたる事のなきまゝ（下略）

凡世の中は、あら山あら野のあるか、おのつから道の出来るか如く、爰もおのつから、神代の道のひろこりて、おのつからくにつけたる道のさかえば、皇いよ／＼さかえまさんものか

すめらみ国の古への道は、天地のまに／＼丸く平かにして、人の心詞にいひつくしかたければ後の人知得がたし

世々皇の伝へ給ふそよけれ、上伝れは、下も伝れり

であつて、如何なるものかと、も一度正せば、「直く」「丸く」「たけき」ものであつて、

